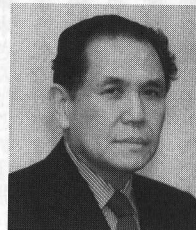


中国も韓国も沖縄米軍基地を「安全弁」として求めている

―翁長知事の「出口」を理解しておかねばならない―

ジャーナリスト 松尾文夫



米大統領選挙戦の展望は次回にまわし、本稿では、翁長沖縄県知事と安倍政権が真つ向から対立し、法廷闘争にもつれ込もうとしている沖縄の辺野古基地新設問題をもう一度取り上げてみたい。アイロニーに満ち満ち、保守、革新双方から論じられていない背景からあえて「出口」を探ることを試みる。

まず確認しておかねばならないのは、沖縄の米軍基地がいまだに隣国の中国、韓国、さらには北朝鮮にとつて、「日本軍国主義の再興を抑え込む安全弁」、つまり英語で言うところ「ビルト・イン・スタビライザー」としての役割を果たしているという現実である。言葉を変えれば、沖縄施政権の返還から一八年経った一九九〇年三月、在沖縄米海兵隊司令官ヘンリー・スタックポール少将が、ワシントン・ポスト紙でのインタビューに「アメリカ軍が日本から撤退すれば、既に強力な軍事力を日本はさらに増強するだろう。我々は瓶のふた(a cap in the bottle)のようなものだ」と答えた。いわゆる「瓶のふた」論である。戦後七〇年経って

も克服できていない日本をめぐる「歴史問題」が東アジアから消えていない現在、この「安全弁」、あるいは「瓶のふた」論は、誰も公には論じないものの、東アジアの一種のインフラとして厳然として残存している。

●「安全弁」としての沖縄基地

そして俯瞰すると、このインフラは一九七二年、ニクソン大統領の北京訪問、毛沢東との握手で実現した中国との和解達成に際し、ニクソン・キッシンジャーのコンビが沖縄米軍基地を抱え込んだ日米安保体制を、当時日本軍国主義復活に最大限の警戒をあらわにしていた中国に対して「引き出物」として差し出し、中国もそれを受け入れたという歴史的な事実から生まれている。キッシンジャーは、ニクソン訪中の約二〇ヵ月後の一九七三年三月三日付のニクソン大統領あて秘密メモの中で、次のように誇らしげに報告している。

「過去二〇ヵ月間の我々の説得の結果、周恩来は今や非公式の場では、日米安保条約が日本の拡張主義と軍国主義に

対する歯止めとなっていることを認めている。彼は北京政府が最近日本との対応において、安保条約を攻撃するようなどことは全くしていないことを指摘していた。」

このメモは二〇〇三年以降、アメリカ国立公文書館で解禁されている。事実、ニクソン訪中後、中国の日本軍国主義復活批判はびたりと止んだ。今この路線は「習近平の中国」においても変わった兆候はない。南シナ海での浅瀬の埋め立てによる中国の「領土拡張」をめぐるアメリカと中国の緊張関係にもかかわらず、この日本の脅威への「安全弁」、あるいは「瓶のふた」インフラは揺らぐ気配はない。

そして、今この沖縄米軍基地を軸とする日米安保条約体制を「ビルトイン・スタビライザー」としての役回りで受け入れているのは中国だけではない。台湾、韓国も同様である。北朝鮮でさえ、金正恩がこれを否定したという情報はない。

●辺野古にアマコスト氏疑問

それに、元自民党の沖縄県連幹事長の経歴をもつ翁長知事の反対は「辺野古への基地新設は沖縄への本土の差別である」との一点に絞られ、日米同盟も否定せず、また嘉手納基地を含め、アメリカの基地は一切認めないというこれまでの沖縄革新派の政治家とは一味も二味も異なる存在である。今こうした知事の側面は表に出ない。しかしこうした立場を変えたとの情報はない。

アメリカ側にも、この翁長知事との「接点」を持つ声が出ている。一九八九年から一九九三年までブッシュ・シニ

ア大統領のもとで駐日大使を務めたマイケル・アマコスト氏である。現在スタンフォード大学アジア太平洋問題研究所顧問として健在な同氏は二〇一五年六月一三日付けの朝日新聞紙上でのインタビューで、はっきり次のように述べている。

「太平洋における米国の戦略基盤として、沖縄は重要な場所であり続けました。嘉手納飛行場は米空軍にとつては王冠の宝石のような存在です。一方で、沖縄に駐留する海兵隊が死活的に重要なものだと私は私には思えません。嘉手納と同様の決定的な役割を海兵隊が担っているという、納得のいく説明を私は聞いたことがない」

アマコスト氏は、安倍首相の安保法制改革に賛成し、先般のワシントンでの議会演説も賞賛する立場である。従って同氏が「王冠の宝石」のような存在だとする嘉手納基地の存在さえ翁長知事が認めれば、「出口」は見えてくる状況が現に存在する。

今アメリカの政治が大統領選挙戦を控え、四年に一度の大きな「衣替え」のシーズンである。何ごとにも変化の可能性を秘めている時期である。

少なくとも安倍官邸が「一〇〇％勝てる」との強硬策一本で進むだけでよいのだろうか。日本に長期的に求められているのは、東アジア全体での「歴史和解」の達成によって、沖縄米軍基地による「安全弁」を必要としない東アジアの構築という外交的な大技であろう。

(二〇一五年一〇月三十一日記)